T4 ルーティングチュートリアル AS内制御 IGP – OSPF –

IIJ 津辻 文亮 <tsutsuji@iij.ad.jp>

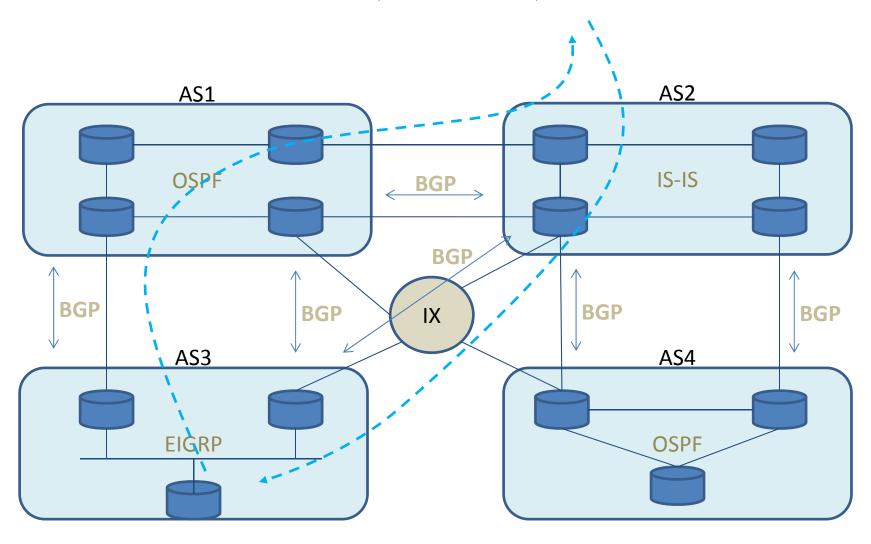
IGP/EGP

- EGP(Exterior Gateway Protocol)
 - AS間とのやり取りに利用する経路制御プロトコル
 - 例: BGP

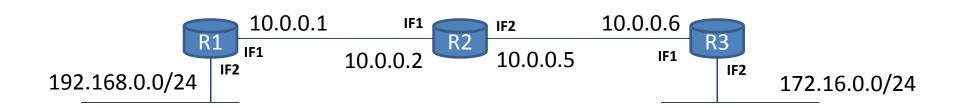
- IGP(Interior Gateway Protocol)
 - AS内で利用する経路制御プロトコル
 - 例: OSPF/IS-IS/EIGRP/RIP

IGP		EGP
ディスタンスベクタ	リンクステート	パスベクタ
RIP	OSPF / IS-IS	BGP

インターネット



経路表(Routing Table)



R1の経路表

宛先	ネクストホップ	学習元
192.168.0.0/24	IF2	direct/connected
10.0.0.0/30	IF1	direct/connected
10.0.0.4/30	10.0.0.2	Dynamic routing
172.16.0.0/24	10.0.0.2	Dynamic routing

- 経路表は宛先をどこに送るかの集合
- 各々のルータが経路表を作成
- 直接つながっていないものを色々な ルーティングプロトコルから学習する
- 各々が経路表を作成し、HOP-by-HOP でパケットを送り届ける

IGP Routing

静的ルーティング

- Connected / Direct: 直接接続

- Static: 静的な安定したルーティング

動的ルーティング

- ディスタンスベクタ型 (RIP)
 - 自分のルーティングテーブルを交換
 - 定期的に情報を交換
- リンクステート型(OSPF / IS-IS)
 - 自分のインターフェース情報を交換
 - 変更があった場合に差分を即座に更新

宛先の検索

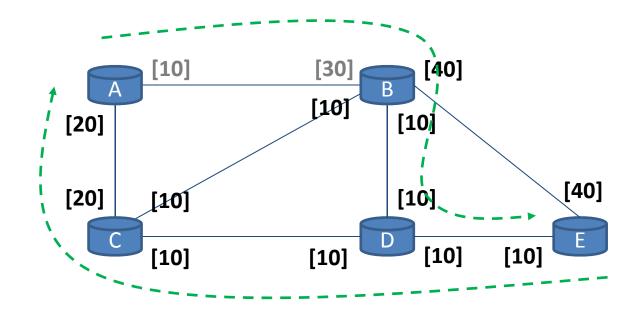
- Longest Match
 - 最長一致。
 - -192.168.0.0/27 > 192.168.0.0/24 >> 0.0.0.0/0
 - 2001:db8::/64 > 2001:db8::/48 >> ::/0
- Protocol による優先度(ベンダ特有)
 - 同じprefixの場合はprotocol優先度で勝負
 - ex. connected > ospf > bgp

OSPF

OSPF 概要

- リンクステート型
 - 各ルータが持つリンクの情報を交換
 - 変更があった場合に即座に通知
- SPFを用いて最短経路を探索
 - リンクステート集合から各々がトポロジーを作成
- 規模に合わせたエリア構成
 - エリア毎の計算による負荷低減
 - 2階層のエリア構成

リンクコストとトラフィック



■ リンクコストには向きがあり、コストによっては、行きと帰りが異なる

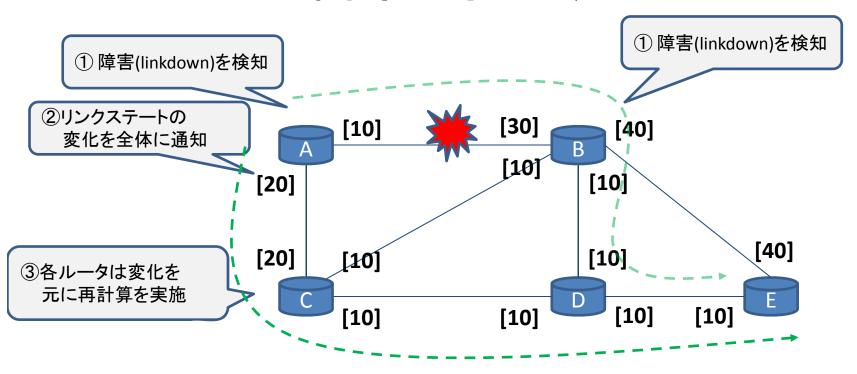
A -> B -> D -> E Cost = 30

E -> D -> C -> A Cost = 40

LSA/LSDB

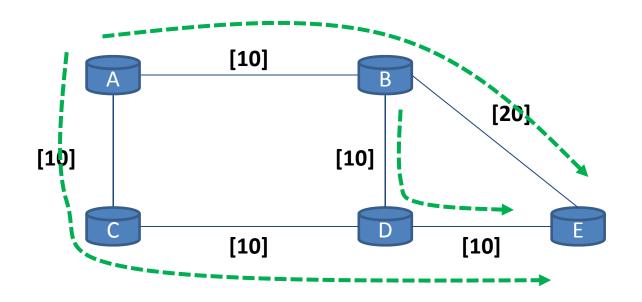
- LSA(Link state Advertisement)
 - OSPFで言うところのリンクステート情報
 - リンク情報やネットワーク情報
 - 情報に応じていくつかのタイプが存在する
 - 各ルータが皆に広告する
- LSDB(Link state DataBase)
 - 各々のルータが広告したLSAを使って構築するDB
 - LSDBを用いて最短パスを決定

障害時の動作



- ■リンクステートを配布するルータが変更を通知
- 障害時には再計算して自動で迂回がかかる

ロードバランス ECMP(Equal-Cost Multi-Path)



■ 最短コストが複数ある場合には、トラフィックを分散させることができる

 $A \rightarrow B \rightarrow E = Cost 30 nexthop B$

 $A \rightarrow B \rightarrow D = Cost 30 nexthop B$

 $A \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow E = Cost 30 nexthop C$

OSPFパケット タイプ

- Type1: Hello パケット
 - neighborの発見、DR/BDR選出、生存確認で利用
- Type2: DBD(データベース記述)パケット
 - データベースのサマリを交換するのに利用
- Type3: LSR(リンク状態要求)パケット
 - Link Stateを要求する場合に利用
- Type4: LSU(リンク状態更新)パケット
 - Link Stateの更新時に利用
- Type5: LSAck(リンク状態確認応答)パケット
 - LSAの受信確認に利用

定常時でも利用

初期の DB同期に利用

> 状態変化時 に利用

受信確認 に利用

OSPFのながれ

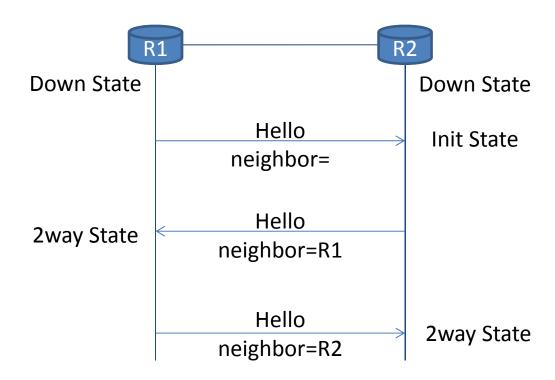
- ネイバー(Neighbor)の確立
- DR/BDRの選出(必要な場合)
- アジャセンシ(Adjacency)の確立
- LSDBの構築と最短パスツリーの構築
- ルーティングテーブル反映

Neighbor **L**Adjacency

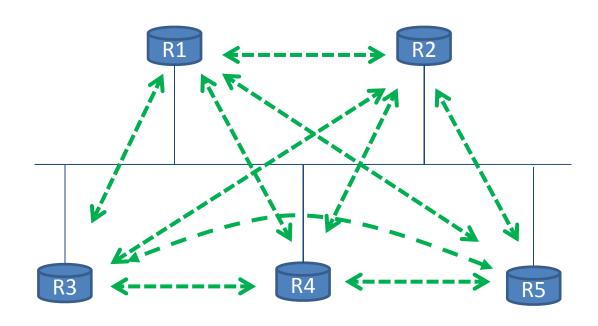
- Neighbor
 - OSPF リンク上に存在する隣接した関係
 - OSPF Helloを送り合い隣接を発見

- Adjacency
 - LSA/リンクステートを交換し合う関係
 - Adjacencyを確立した同士でLSDBの同期を実施

Neighborの確立

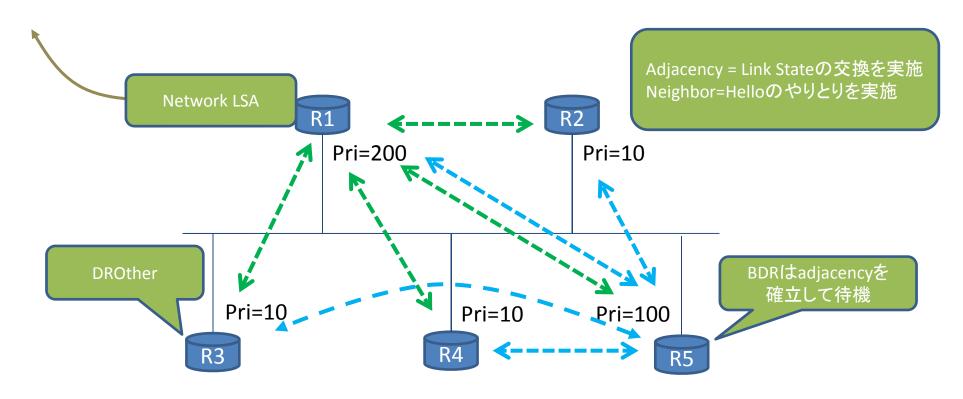


DR/BDR とは



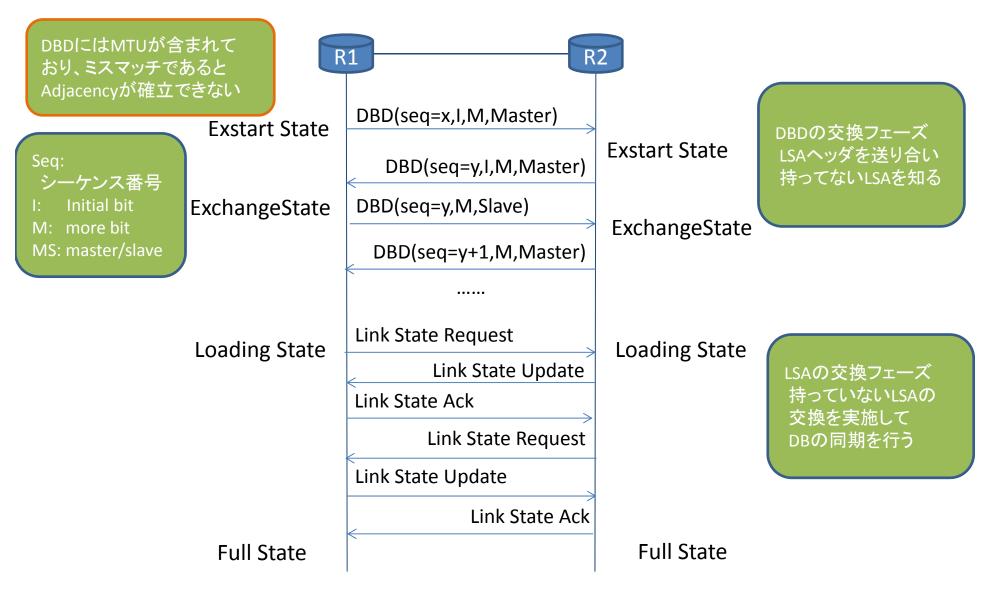
■ DR/BDRはそれぞれ指名ルータ、バックアップ指名ルータと呼ばれる DR/BDRがなく、メッシュ状に隣接関係を結ぶと隣接関係が大きくなり やりとりが増大するため、DRという代表者を決めて隣接関係を形づくる

DR/BDRの選出



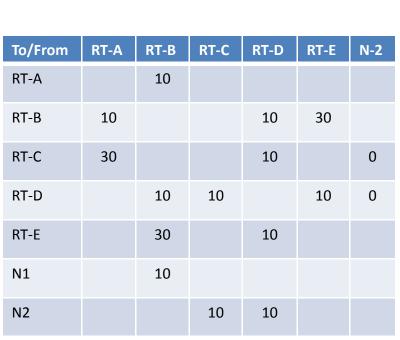
- Hello packetにPriority値が含まれて、HelloでDR/BDRを選出
- Priorityが同じ場合には、RouterIDの大きいものが選出される
- DR/BDRがその他(DROther)とadjacenctyを確立する
- DRがNetwork LSAを生成する

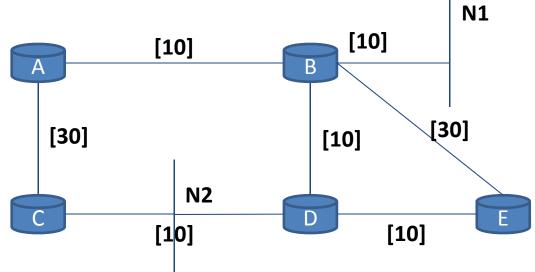
Adjacencyの確立



LSDBの構築

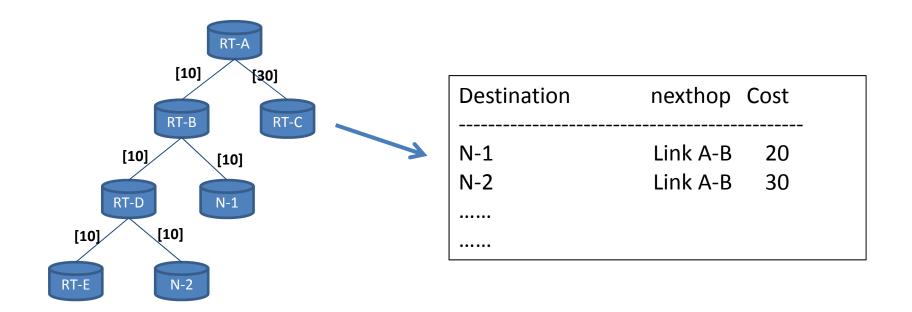
• リンクステート(Link State)からLSDBを構築





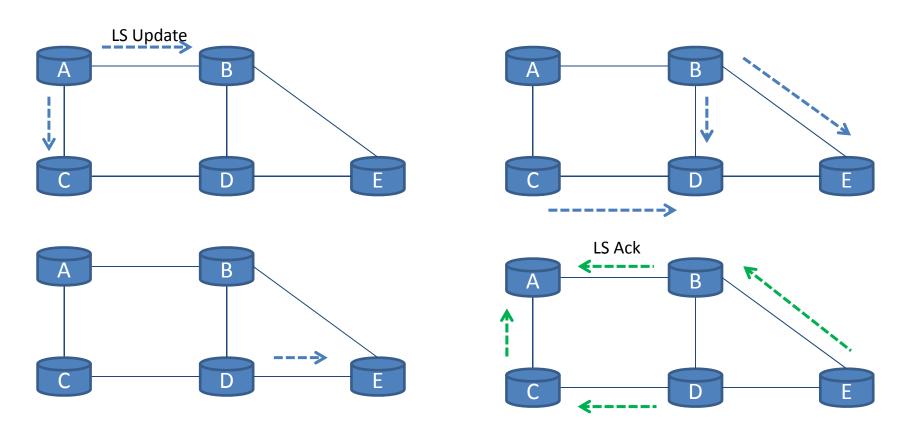
最短パスツリーの構築と ルーティングテーブル作成

• 自分を始点(root)としてSPTを作成



ルータに設定したIPアドレスはRT-Xに接続されているものとしてLSDBが形成され、SPT(最短パスツリー)が作成される。

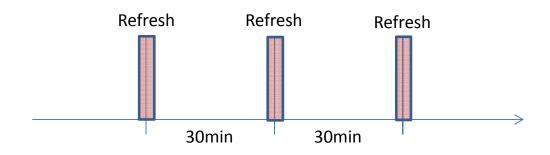
Flooding



- LSAの変化がある場合には、LSUpdateを用いてadjacencyへ伝達される
- Checksumとより新しいかを確認し、他の隣接したインターフェースへ伝達する
- LS Ackで応答。応答があるまで定期に再送することで信頼性を確保

aging time & refresh

- Aging timeは、生成されてからの経過時間
- Max age(=60min)でLSAは捨てられる
- LSAは、30min程度でsequenceを上げてリフレッシュされることで保持され続ける
- OSによってdefaultのrefresh timeが異なる
 - 実際は負荷分散のために、分散してUpdate



Router ID

- 32bitでOSPFルータをuniqueに識別
- Router IDの選択
 - 1. Router-idで指定したIPアドレス
 - 2. Loopback Interfaceの最大のIPアドレス
 - 3. ルータ上の最大のIPアドレス

RouterIDを変更したり、障害で選択されるIDが変化するとLSDBが崩壊する恐れがあるため、Router-IDを設定するのがよいでしょう

LSAの種類

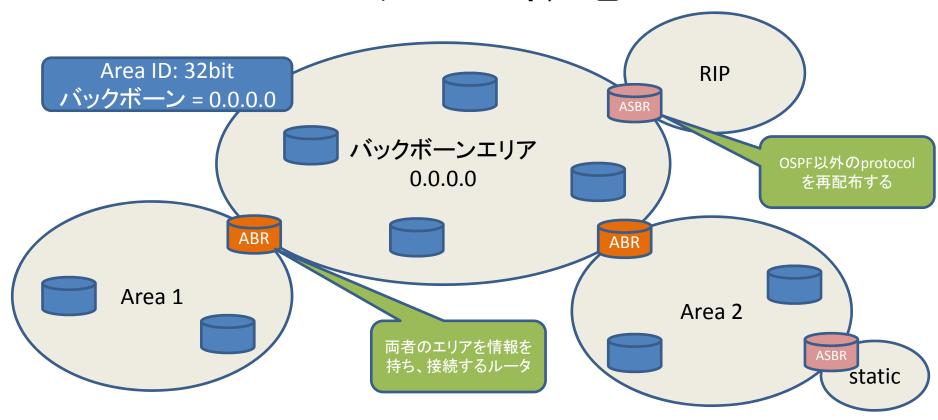
- 1. Router LSA
 - すべてのルータが生成
 - ospfに参加するすべてのリンクの情報
- 2. Network LSA
 - DRが生成。Networkに含まれるルータの情報
- 3. Summary LSA(Type 3)
 - ABR(エリア境界ルータ)が生成
 - Area外のNetwork情報
- 4. Summary LSA(Type 4)
 - ABRが生成。ASBR(AS境界ルータ)の情報
- 5. AS-External LSA
 - ASBRが生成。外部経路(AS境界ルータの向こう側)のNetwork情報
 - 実際には、staticからの注入だったり。別protocolからの注入

拡張LSA

- 6. Group-membership LSA
 - MOSPF用に拡張
- 7. NSSA-external LSA
 - NSSA エリア用に拡張
- 8. External-attributes LSA
 - BGPのattributesを運ぶために拡張
- 9. Opaque LSA(link-local scope)
- 10. Opaque LSA(area-local scope)
- 11. Opaque LSA(as-wide scope)
 - Traffic-engineering-lsa, grace-lsa...

エリア

エリアの概念

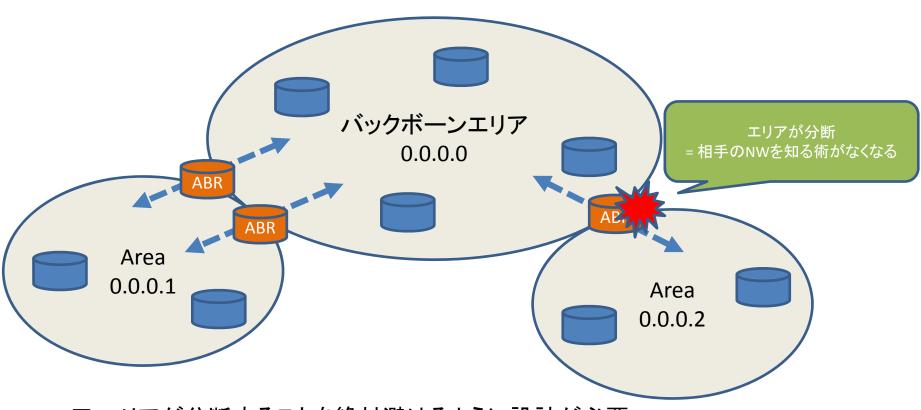


- エリアを分割することでSPF計算の範囲をエリアに限定
- ABR(エリア境界ルータ)は複数にエリアに属しエリア毎のトポロジーを知る
- 各エリアは必ずバックボーンエリアに隣接する必要がある

エリアの種類

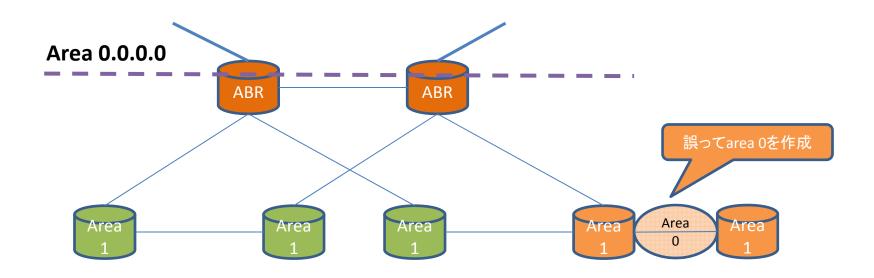
- バックボーンエリア(Backbone Area)
 - すべてのエリアがこのエリアに隣接する
- 標準エリア(Area)
 - バックボーンエリアへは、ABR(Area Border Router)が仲介
- スタブエリア(Stub Area)
 - 外部経路を受け取らない → default routeで代用
 - ASBRは配置できない
- トータリースタブエリア(Totally Stubby Area)
 - Summary経路も受け取らない → default routeで代用
- NSSA(Not so Stubby Area)
 - スタブエリアにASRRを配置できるようにしたもの
 - NSSA内はType-7をAdvertiseし、Area 0.0.0.0へはType-5に変換

エリア分断



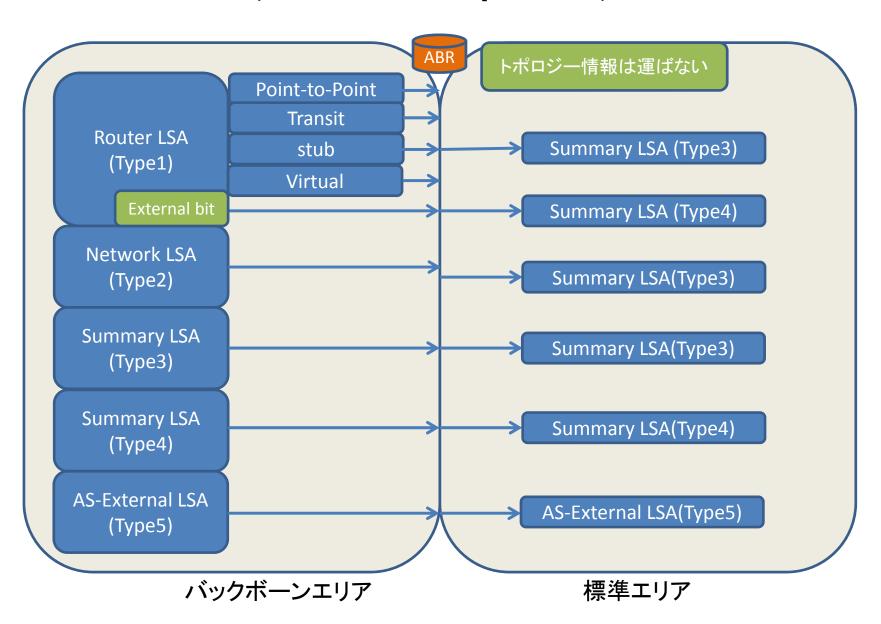
- エリアが分断することを絶対避けるように設計が必要
- ABRは両者のトポロジーを計算する
- 分断を避けるために2台以上のABRは必要

エリア分断 Cont.

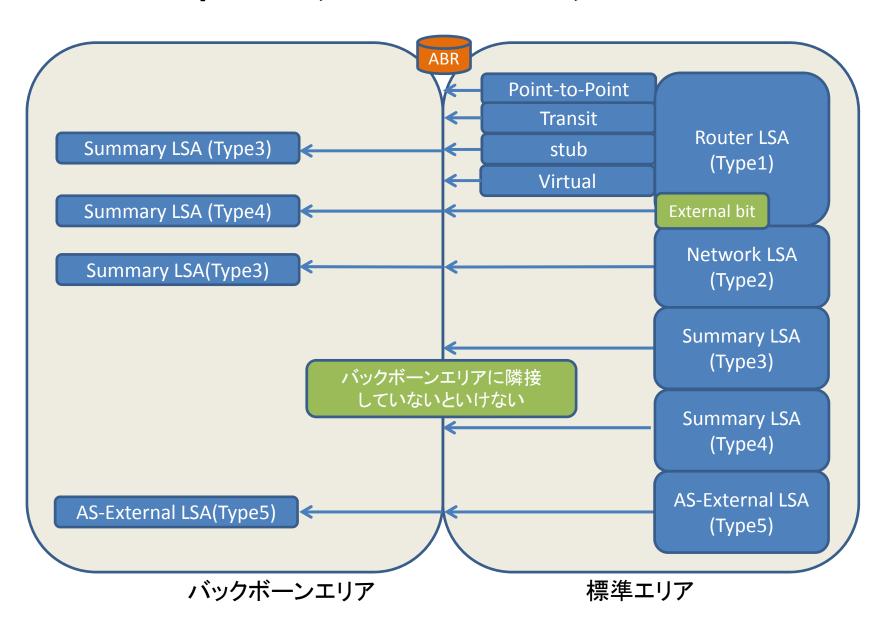


- ABRはバックボーンエリアからのsummary-LSAしか採用しない
- 孤立したarea 0.0.0.0をつくった場合には、孤立したバックボーン エリアからのsummary-LSAしか計算されないため、結局は孤立 した結果となるので要注意

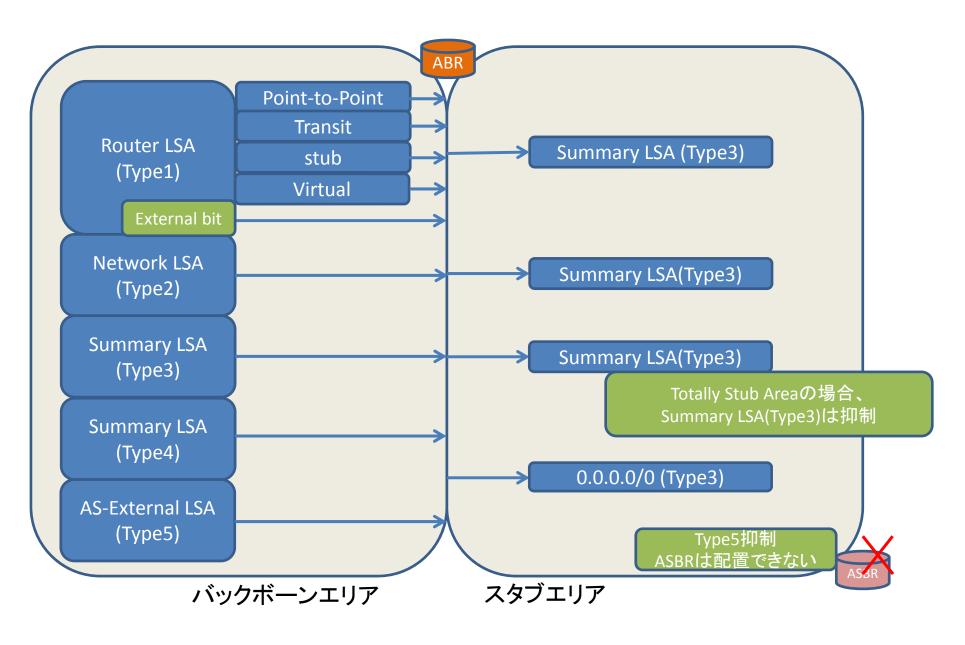
エリア0から他エリアへ



他エリアからエリア0へ



Stub Area



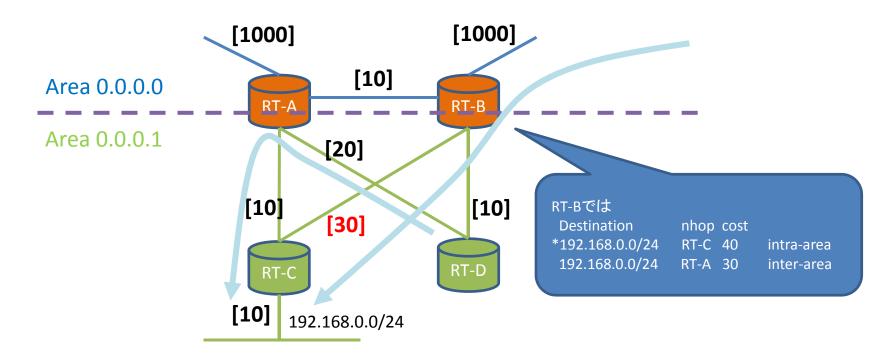
エリア経路の優先

AS内·AS外経路	経路の種類名前	説明
内部ルート	Intra-area	LSA type1/type2の経路
	Inter-area	LSA type3/4の経路
外部ルート	external type1	外部と内部コストの合計
	external type2	外部コストのみ

• 優先順序

- 1. Intra-area(エリア内経路)
- 2. Inter-area(エリア外経路)
- 3. type1 as-external(外部経路 type1)
- 4. type2 as-external(外部経路 type2)

エリア経路の優先 Cont.



- 経路の優先度により、costに関係なくintra-area routeが優先される
- ■エリアを構成する時は、よく考えて設計が必要

エリアの利用

- メリット
 - トポロジー(LSDB)を小さくできる
 - SPFの計算の負荷を下げる O(I*log(n))
- デメリット
 - 設定、構成が複雑になり、メンテナンス性が悪い
 - ABRの設計と冗長化で機器、運用共にコスト高

デメリット >> メリット 最初からエリアをきることは考えない方がシンプル

エリアの利用 Cont.

- ルータの高性能化
 - メモリ、CPUの大容量化
 - ルーティングとフォワーディングの分離
 - ルーティングに専念できるパフォーマンス
- 高速迂回のトレンド
 - 経路集約は他エリアにイベントを通知しない
 - エリア毎のSPF時間

バックボーンエリアで十分 LSA(type 1/2)のみ考えることがシンプル



Protocol番号と利用Address

- IP Protocol=89を利用
 - ospfv3も同様(next header = 89)
- Multicastを利用して情報を交換
 - ALLSPFRouters(224.0.0.5/ff02::5)
 - ALLDRRouters(224.0.0.6/ff02::6)
 - ospfv3では、link-local Addressを利用

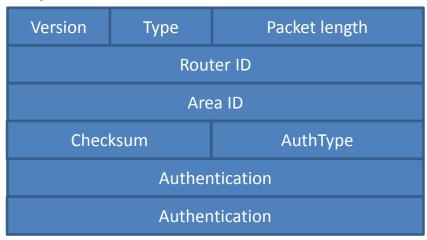
OSPFv3 OSPFv2の違い

- LSAが再定義。トポロジーが分離
- OSPF headerはアドレス非依存に
- Flooding Scopeが定義
- IPv6 link-Local Addressを利用
- multiple instance per link
- Authentication がヘッダから削除

LSAパケットフォーマット (ospfv2, ospfv3)

ospfv2 / ospfv3 header

ospfv2 Header



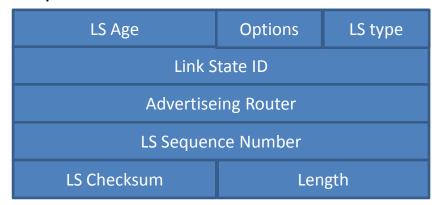
ospfv3 Header



- 24 bytes → 16bytes
- RouterID/AreaIDは32bitのまま維持
- multiple instance対応(defaultは0)
- Authenticationへッダ削除 → RFC4552

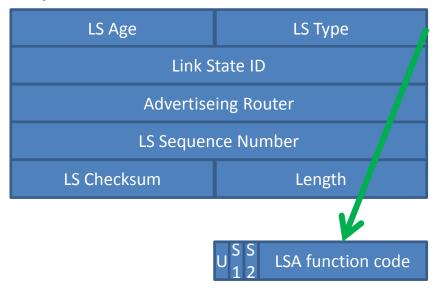
ospfv2 / ospfv3 LSA header

ospfv2 LSA Header



Options fieldは各種LSAの中で定義

ospfv3 LSA Header



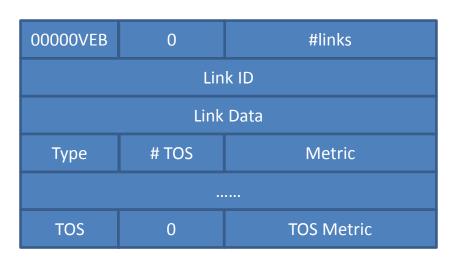
U: function codeが理解できない 場合の取り扱いについて

S1/S0: flooding scope

LSA type

Туре	LSA	Function code	LSA	LS type code	Flooding scope
1	Router LSA	1	Router LSA	0x2001	Area Scope
2	Network LSA	2	Network LSA	0x2002	Area Scope
3	Network Summary LSA	3	Inter-Area-Prefix LSA	0x2003	Area Scope
4	ASBR Summary LSA	4	Inter-Area-Router LSA	0x2004	Area Scope
5	AS-external LSA	5	AS-External LSA	0x4005	AS Scope
6	Group Membership LSA	6 拡張	Group-Membership LSA	0x2006	Area Scope
7	NSSA External LSA	7	Type-7 LSA	0x2007	Area Scope
8	External Attributes LSA	8	Link LSA	0x0008	Link-local Scope
9	Opaque LSA(link-local scope)	9	Intra-Area-Prefix LSA	0x2009	Area Scope
10	Opaque LSA(area-local scope)	10	Intra-Area-TE LSA	0xa00a	Area Scope
11	Opaque LSA(AS scope scope)				

Router LSA(0x2001)



000NtxVEB	Options		
Туре	0 Metric		
Interface ID			
Neighbor interface ID			
Neighbor Router ID			

- Type: {point-to-point, transit, reserved, Virtual link}
- interface ID = MIB II ifindex (ではない場合も)

Link state ID	Link Type	Link id	Link data
Router ID	1	Neighbor Router ID	Interace IPaddress MIB II infindex
	2	DR OIP address	Interface IP Address
	3	Network address	IP subnet mask
	4	Neighbor Router ID	Interace IP Address

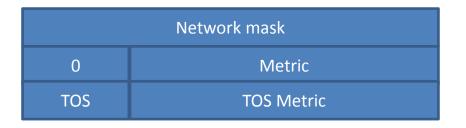
Network LSA(0x2002)

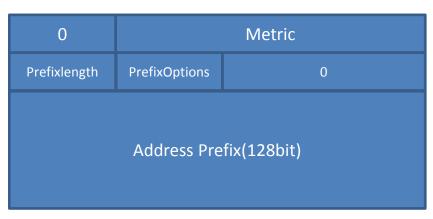
Network mask
Attached Router
.....



- link state idは、DR \mathcal{O} IP Address → DR \mathcal{O} interface ID
- attached Routerは32bitのままなので、Router IDが入る

inter-area-prefix LSA(0x2003)





- ospfv2のtype 3(summary LSA)はarea外のprefixを運ぶ(役割は同じ)
- ospfv2では、Link state IDにnetwork addressがセットLSAの中のNetmask maskのセットでprefixを運ぶ

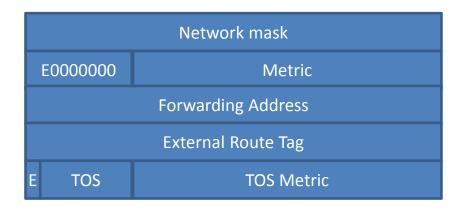
inter-area-Router LSA(0x2004)

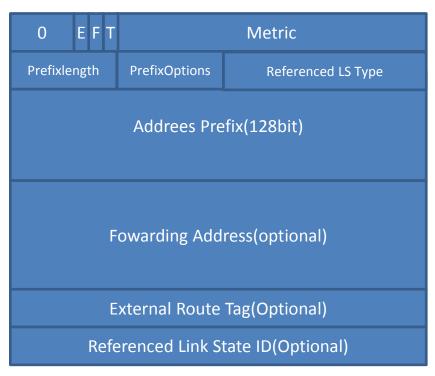
Network mask			
0	Metric		
TOS	TOS Metric		

0	Options		
0	Metric		
Destination Router ID			

- ospfv2のtype 4(summary LSA)はABSRの情報を運ぶ(役割は同じ)
- ospfv2の場合は、Link State IDにASBRのRouter IDがセットされ、Netmask mask=0がセットされる(実際のexternal経路はtype5で運ぶ)
- ospfv3では、ASBRのRouter IDだけがセットされる

AS-external LSA(0x4005)

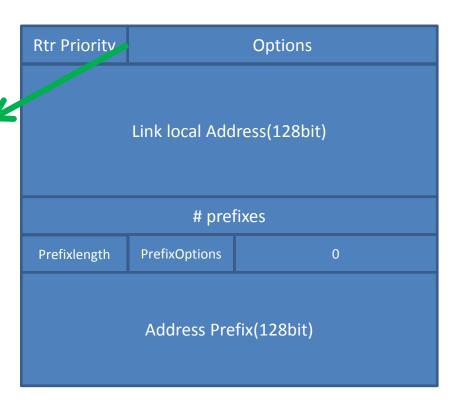




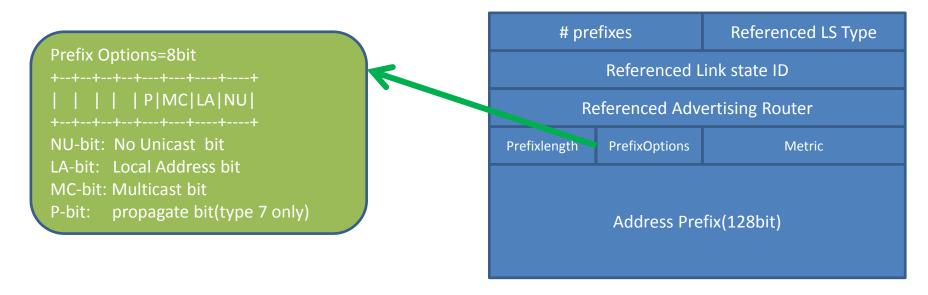
- ospfv2/ospfv3の両者ともexternal route(外部経路)の情報を運ぶ
- E-bit/は1=type2, 0=type1, F-bit = Forwading Prefix, T=External Route Tag

link LSA(0x0008) ospfv3 only

Options=24bit(下位8bitのみ記載) +--+--+---+---+---+---+ | | DC| R| N| x| E|V6| +--+--+---+----+----+ V6-bit: clearされるとrouting calculationから除外 E-bit: External bit X-bit: MOSPFで利用 N-bit: NSSAで利用 R-bit: Router bit(active) DC-bit: Demand circuit bit



intra-area-prefix LSA(0x2009) ospfv3 only



- 参照LS Type , Link State ID, Advertising Routerがセット
- Prefix情報を伝搬

RFC

- rfc2328 OSPF Verion 2
- rfc3101 The OSPF Not-So-Stubby Area(NSSA) Option
- rfc3137 OSPF Stub Router Advertisement.
- rfc3630 Traffic Engineering (TE) extensions to OSPF Version 2
- rfc4552 Authentication/Confidentiality for OSPFv3
- rfc5250 The OSPF opaque Isa Option
- rfc5340 ospf for ipv6
- rfc5329 Traffic Engineering Extensions to OSPF Version 3
- rfc5838 Support of Address Families in OSPFv3

IGP 設計と運用

設計のポイント

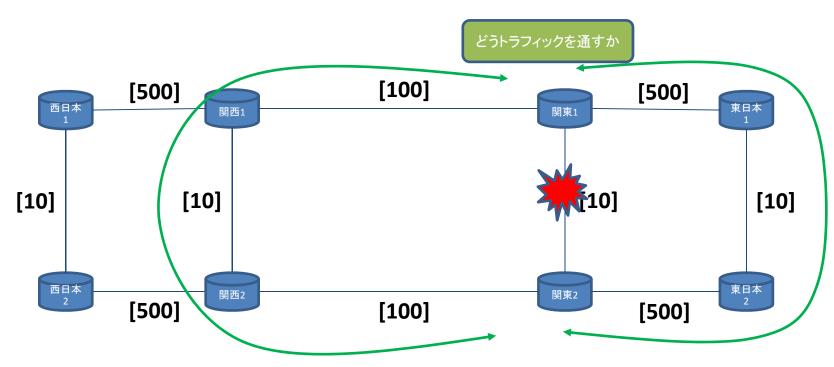
- 信頼性(安定稼働)
 - 物理リンクの不安定さが余計な再計算を生む
 - 信頼のおけるメディアを選択
 - 日々のOSPFのリソースやイベントを知ることが必要(SNMP/debug)
- 拡張性
 - prefixをOSPFに注入のし過ぎはLSDBの増大を招く
 - トラフィックコントロールは拡張性のために、ある程度の指針を決めておく
- 運用性
 - NW設計とオペレーションはシンプルに保つ
 - 切り分けや障害時間の短縮
- 品質
 - N+1設計や十分な帯域確保
 - 障害時の迂回速度を考えたネットワーク設計
 - セキュリティ(OSPF AUTH)で自組織を守る

BGPとIGPの関係

- BGPはprefixを伝搬
 - BGPはprefix情報とNEXT-HOP属性を運ぶ
 - NEXT-HOP属性を解決するのにIGPで再帰解決
 - IGPの収束・変更がBGPの経路に大きく影響する

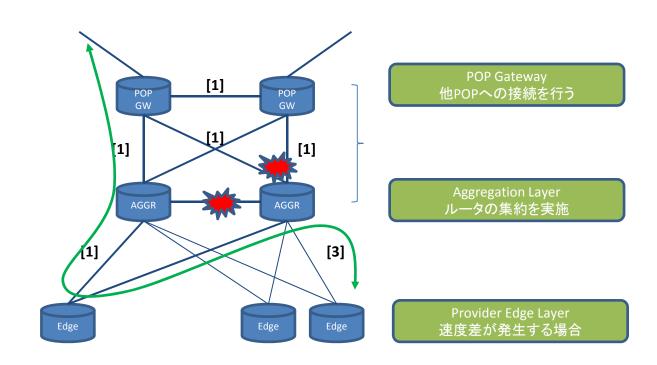
宛先	ネクストホップ	学習元	
10.0.0.0/16	192.168.0.1	BGP	
10.1.0.0/16	192.168.0.2	BGP	
192.168.0.1	IF_X	IGP	
192.168.0.2	IF_Y	IGP	

コスト設計



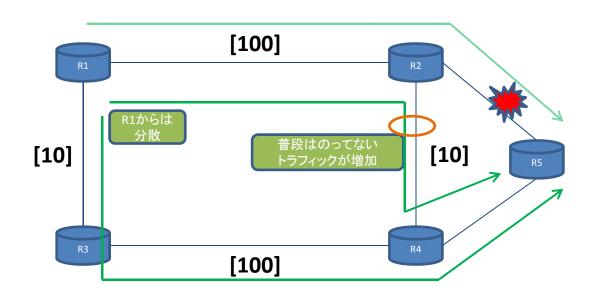
- コア拠点を中心に考え、距離(遅延)を考慮したポリシーを決めておく
- コスト設計 = ポリシーの設計なので、どこを利用するのがいいかをあらかじめ決めておく
- 関東コア同士が切れた際に東日本POPを経由したくない 関東1 ~ 東日本1 ~ 東日本2 ~ 関東2 > 関東1 ~ 関西1 ~ 関西2 ~ 関東2 そもそも関東コア同士は切れないように冗長回線が必要
- 西日本1 ⇔ 西日本2同士の通信は普段はコアを回したくない 西日本1 ~ 西日本2 < 西日本1 ~ 関西1 ~ 関西2 ~ 西日本2</p>

コスト設計 Cont.



- POP内の設計は遅延差がないので速度差を考えてリンクコストを決めておく
- ○シャーシ型ルータではカード単位で死ぬことも考え、カード分散も考慮に入れる
- 〇 いざトラフィックが流れてもいいようにコスト差をつけておき障害に備える
- エリアを切るとintra-area優先や分断を考慮して設計する必要がある

ネットワーク設計 1



■ 普段利用されないが、障害時を想定して帯域の確保が必要

R2 ⇔ R4のリンクに新たに増えるトラフィック

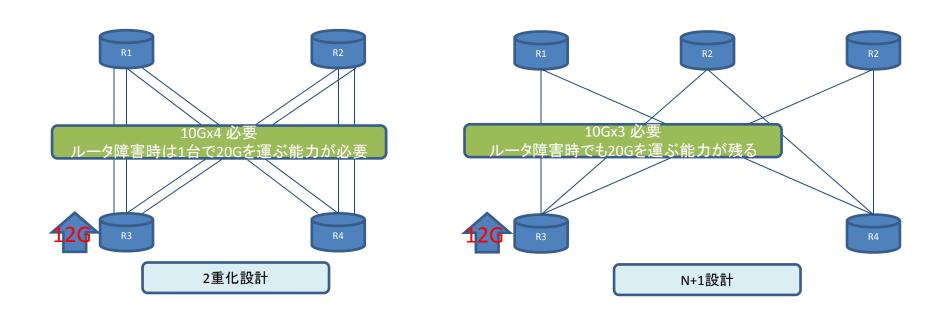
R2 ⇔ R5のトラフィックの全部

R1 ⇔ R5のトラフィックの半分くらい (ECMP)

R3 ⇔ R4のリンクに新たに増えるトラフィック

R1 ⇔ R5のトラフィックの半分くらい

ネットワーク設計



■ ルータ間の接続リンクが回線である場合には、N+1設計を実施するとリンク数が抑えらる

2重化設計: 12Gのトラフィックをさばくためには、40Gのリンクが必要

N+1設計: 12Gのトラフィックをさばくためには、30Gのリンクで十分

アドレッシング

- インフラアドレス
 - Loopback BLOCK(/32, /128)
 - Point-to-Point(/30, /126, /127)
 - POP単位
- ボーダアドレス
 - 顧客ボーダアドレス(/30, /2X)
 - AS Border(IX, Private Peering)
- 顧客割り当て
 - 割り当て用
 - サービス用途
- 特殊用途
 - Multihop用途のアドレスブロック

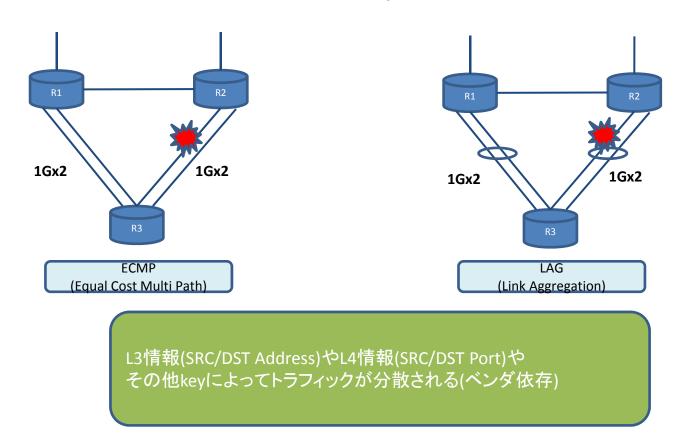
IGPから孤立した場合に隣接したルータからログインできるようにしておくのかそれとも完全に裏線を用意しておくのか予め対策を決めておくことが大事

AS外から到達する必要のない インフラブロックをシンプルにACL が書けるように心がける

DR/BDR設計

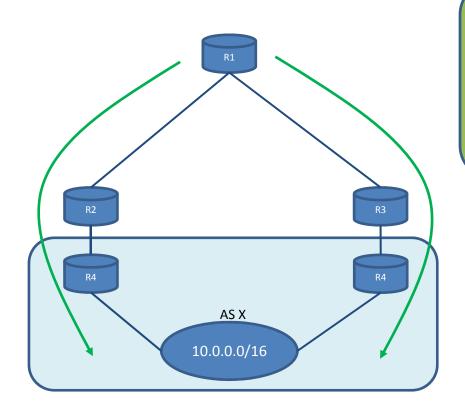
- DR/BDRの選択
 - DR/BDRは不安定なルータを選択しない
 - セグメントの障害を避けるために二重化
 - 二重化したセグメントのDRを同一にしない
 - 障害でDR/BDRが重なった場合は正しい姿に
- DR/BDRの操作
 - "ip opsf priority <0-255>でDRを指名
 - "priority 0"でDRを放棄することが可能

ECMP/LAG



■ ルータ間に2本以上の接続がある場合は、障害で速度差が発生する

ibgp multipath

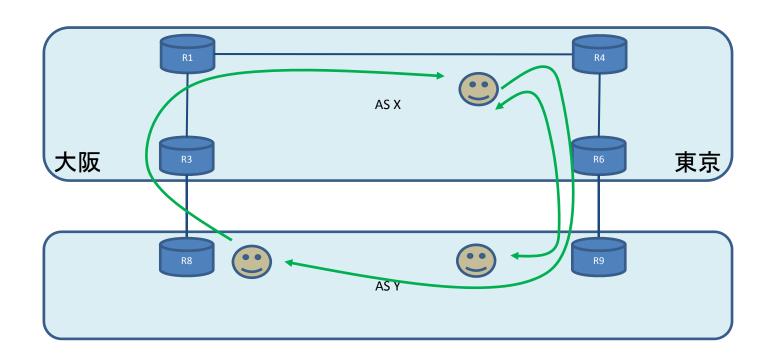


R1:

*10.0.0.0/16 nexthop R2 10.0.0.0/16 nexthop R3 Best経路は、1つしか選択されないので 通常はR2にしかトラフィックは流れない

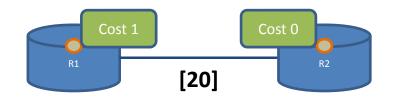
- BGP経路を複数の出口からバランスさせたい場合にibgp multipathを利用
- BGPのベストセレクションでnexthopまでのigp costが同一であれば、 マルチバスが実現可能

AS間 トラフィック交換



■ 対等な関係のAS間のトラフィックの交換は、hot-potatoルーティングが基本 自ASのIGPのメトリックに応じて出口が決定(自分のリソースが最小限になる)

loopbackまでの距離 1



IOS & JUNOS

R1 Loopback: 10.0.0.1/32 Cisco R2 Loopback: 10.0.0.2/32 Juniper

R1 – R2: 192.168.0.1/30 – 192.168.0.2/30

R1> sh ip route 10.0.0.2

Routing entry for 10.0.0.2/32

Known via "ospf 1", distance 110, metric 20, type intra area Last update from 192.168.0.2 on GigabitEthernet1/1 6d21h ago

Routing Descriptor Blocks:

* 10.0.0.2, from 10.0.0.2, 6d21h ago, via GigabitEthernet1/1 Route metric is 20, traffic share count is 1

R2> > show route 10.0.0.1

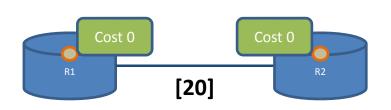
inet.0: 36 destinations, 37 routes (36 active, 0 holddown, 0 hidden)

+ = Active Route, - = Last Active, * = Both

10.0.0.1/32 *[OSPF/10] 6d 21:54:09, metric 21 > to 192.168.0.1 via ge-0/0/1.0

Loopbackはbgpのnexthopになり得るので、機器を変更すると コスト差が発生して意図しないバランスになるので要注意

loopbackまでの距離 2



LoopbackはLA bitがセット Prefix length 128、Cost 0で運ぶ

ospfv2 ∠ ospfv3

R1 Loopback: 2001:db8:10::1/128 Cisco IOS R2 Loopback: 2001:db8:10::2/128 Juniepr Junos R1 – R2: 2001:db8::1/64 – 2001:db8::2/64

R1> show ipv6 route 2001:db8:10::2

Routing entry for 10.0.0.2/32

Known via "ospf 1", distance 110, metric 20, type intra area Route count is 1/1, share count 0

Routing paths:

FE80::217:CBFF:FEDA:625, GigabitEthernet1/1

Last updated 00:05:19 ago

R2> > show route 2001:db8::10::1

inet6.0: 24 destinations, 25 routes (24 active, 0 holddown, 0 hidden)

+ = Active Route, - = Last Active, * = Both

2001:db8:10::1/128

*[OSPF3/10] 00:04:28, metric 20

> to fe80::20a:41ff:fe43:d080 via ge-0/0/1.0

ospfv2 と ospfv3でCost差が出てしまうので Dualstack環境では要注意

STUB Router Advertisement

- Router LSAのtype stub以外のCostを上げることで どのどこから見ても遠くみえるのでパケットは通 らない
 - Cisco: max-metric router-lsa
 - Junos: set protocols {ospf|ospfv3} overload
 - シンプル イズ ベスト. SPFも一度に!
- 一定時間指定を入れておくと再起動時も安心
 - Cisco: on-startup
 - Junos: timeout
 - 経路学習する時間以上を設定

OSPF Hello Timer

- Neighbor同士で死活監視に利用
 - Hello interval = 10sec
 - Dead timer = 40sec
 - 40秒相手からHelloがなかったらDownと判断
- Helloタイマの変更
 - 検知高速化に使うには負荷がかかる(last resort)
 - 物理レイヤで落ちるリンクを利用する
 - BFD(Bidirectional Failure Detection)利用
 - iBGP hold-timer > IGP Down timer
 - BGPが落ちると、経路を持たないblackholeルータの原因に

ルーティングの収束

• IGP Convergence =

検知時間 + 伝搬時間 + SPF計算時間 + RIB反映時間 + FIB更新時間

検知短縮のアプローチ

警報転送可能なメディア、P2Pトポロジー、BFDを使って検知時間 link-down検知するまでの遅延時間(carrier-delay, upが早いと不安定に) 伝搬時間/SPF計算時間のアプローチ

伝搬時間は様々な要因があるのでチューニングベンダとよく相談 余計に不安定な要素を生む可能性あり

伝搬時間に頼らないmicro-loopの起こりにくいトポロジーも効果的 RIB/FIB更新時間のアプローチ

> インターネット経路の増大に伴うFIB更新時間のインパクトは大きい FIB階層化も効果的

Timer Tuning

R1> sh ip ospf

Routing Process "ospf 1" with ID 10.0.0.1 Start time: 00:02:14.428, Time elapsed: 3w0d

Supports only single TOS(TOS0) routes

Supports opaque LSA

Supports Link-local Signaling (LLS)

Supports area transit capability

Supports NSSA (compatible with RFC 3101)

Event-log enabled, Maximum number of events: 1000, Mode:

cyclic

It is an area border router

Router is not originating router-LSAs with maximum metric

Initial SPF schedule delay 5000 msecs

Minimum hold time between two consecutive SPFs 10000 msecs

Maximum wait time between two consecutive SPFs 10000 msecs

Incremental-SPF disabled

Minimum LSA interval 5 secs

Minimum LSA arrival 1000 msecs

•••

IF設定

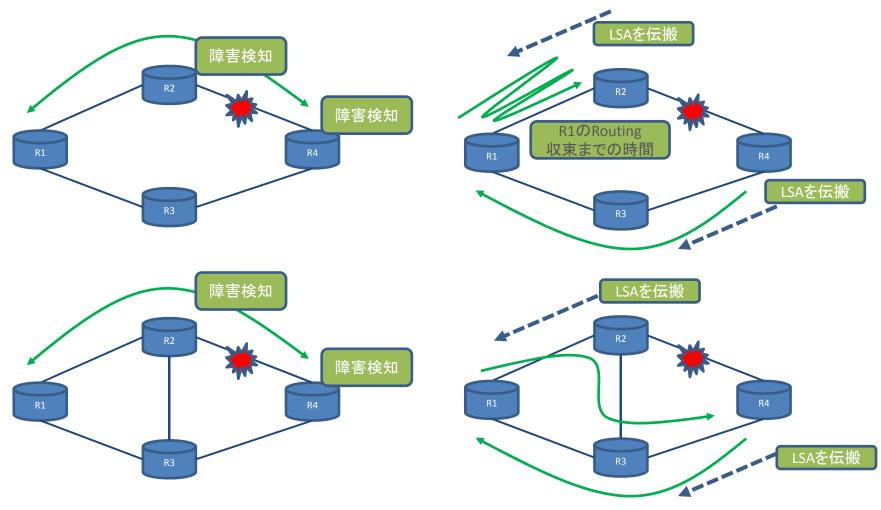
carrier-delay down <ms> up <ms> upは早い必要はない

OSPF timer

timers throttle spf <start> <hold> <max> LSAを受け取ってSPFを開始する時間 timers throttle Isa all <start> <hold> <max> LSAを生成する時間 timers Isa arrival <hold> LSAを受信する時間 ベンダによく相談してから入れましょう

IOSのdefaultは決して早くはないが、設定変更する場合は 他機器と値が異なれば、全体の収束がバラバラになるので要注意

micro-loop



物理的なトポロジーでDown時間も変わってくる

Dualstack 対応

- 性能
 - 機器性能の確認、IPv6転送処理
 - FIB容量(IPv4/IPv6/MPLS)
 - FIB階層化検討
- IGP選択
 - ospfv2/ospfv30 multi-process
 - IS-ISO single-process
 - Support of Address families in ospfv3(RFC5838)
- 構成
 - v4/v6が異なるトポロジーは超混乱の元!

セキュリティ

- OSPF Authentication
 - 信頼できるリンクと信頼できないリンクはMD5は分けておく(つながっちゃーまずい)
 - ospfv3はISPECで守る
- Infrastructure ACL
 - ルータでの制御
 - 信頼されたブロックからのACL
 - RP防御のrate-limitなど
 - ASボーダでの制御
 - AS外部からインフラ宛への到達性は不要

おわり